議　　長　　次に、受付番号第２号、中野博君の一般質問を許します。登壇願います。

５　番　中　　野　　前任者が余りにも早すぎたため、心の準備ができないうちに私の順番が回ってきてしまいまして、口下手な部分は平にお許しを願いたいと思います。それでは一般質問をさせていただきます。受付番号第２号、質問議員、第５番　中野博。件名、地方創生に向けた町の取り組みを問う。

要旨（１）人口減と少子高齢化、全国の自治体が多くの課題を抱えているなか、我が町でも扶助費や義務的経費も高どまりし、財政の硬直化を招いています。国が地方創生の一環として平成27年度中に求めていた人口ビジョンと総合戦略の策定は。

（２）再燃化されてきた合併問題についてのお考えをお伺いいたします。

（３）松田ブランド認定委員会というものが設立されたようですが、そのことについて詳細にお答えをいただきたいと思います。以上でございます。

町　　長　　それでは、中野議員の御質問にお答えをさせていただきます。まず、人口ビジョンと総合戦略の策定に関する質問でございます。平成26年11月にまち・ひと・しごと創生法が制定され、国においても同年12月にまち・ひと・しごと創生長期ビジョン及びまち・ひと・しごと創生総合戦略が策定をされました。松田町においても国の総合戦略の考え方を基本といたしまして、人口減少を抑制し将来にわたって活力のある松田町の創生を町民と行政が一体となって取り組むことを目的とし、産業・大学・金融・労働・言論・行政の各分野で構成します松田町総合戦略審議会を昨年７月から５回にわたって開催をいたしまして審議を進めてまいりました。

後ほど全員協議会で詳細説明をさせていただきますが、まずこの人口ビジョンと総合戦略の大まかな関係性であります。人口ビジョンは本町における25年後、平成52年の人口を将来目標人口として１万人として設定をするものでありまして、総合戦略とはこの将来目標人口を達するための施策を定めたものと御理解をいただければと思います。特に地方創生の重要な要素の一つであります少子化対策においては、若い世代の結婚・出産の希望をかなえることが重要であると言われております。これまで子育て家庭の就労を支える側面から、保育ニーズへの対応や子育て家庭の経済的負担減への取り組みを積極的に進め、若

い世代の経済的な安定や子育て支援策の充実に取り組んでまいりました。引き続きこれらの取り組みの充実を図り、子育てしやすい環境整備を図ることが重要だというふうにも考えております。また、すぐれた子育て支援施策等の特徴的施策や町の魅力に関する情報発信の一層強化をし、住みやすさを実感していただくとともに松田町の魅力を再発見・再認識していただくこととして定住化を促し、最終的には転出抑制につなげることが重要であるというふうに考えております。

総合戦略につきましては、先ほどの人口ビジョンの将来目標人口を実現するための効果的な施策を、住環境づくり、子育ての環境づくり、快適に暮らせる環境づくり、産業・交流づくりの４つの基本目標を定めるとともに、５年後を基本として実現すべき成果に係る目標数値を設定し、基本目標の各施策・事業にはその効果を客観的に検証できる重要業績評価指数ＫＰＩというものを設定しております。人口ビジョン総合戦略につきましては、この後の全員協議会で皆様にごらんいただき、大きな修正点がなければ年度末までに策定ということで運びとさせていただいております。

続きまして、再燃されてきた合併問題についてお答えをさせていただきます。先日の全員協議会でもお話をさせていただきましたように、１月７日に小田原市・南足柄市の両市の副市長さんが御来町いただき、両市において圏域の中心市の市と、近隣の自治体が連携をして一定の人口規模と地域経済を維持・発展させる連携中枢都市圏を形成していくことや、そのために中心市のあり方について話し合う協議会を本年10月をめどに設立するとの説明を受けて、その後、２月２日に記者発表でこのことが報じられまして、２月４日の神奈川県西部広域行政協議会において改めて両市長さんのほうから直接に御説明を受けたところであります。

私といたしましては、この２つの市の取り組みにより周辺地域の広域連携のあり方、広域連携強化については議論することは大いに有意義なことだというふうに考えております。また、それらを議論する上では町民側の機運というものも当然なければ成り立たないというふうに思っております。そういった意味でも、提案をいただいた連携中枢都市圏に向けた議論を端緒に、いま一度圏域

全体の将来について住民の方々とともに考えるべきであるというふうにも思っておりますので、全国的に人口減少や高齢化が進む中、今後、基礎自治体としてどのように安定的な住民サービス・行政サービスを提供して、効率的また効果的な施策が展開できるかということは非常にどの市も大きな課題であるというふうに思っておりますので、これまでも１市５町、２市８町という枠組みの中で、一部事務組合や事務の委託などによってさまざまな分野で広域行政を進めてきております。

そうした中、課題解決のためには行財政基盤を強固なものにし、安定的な行政サービスを提供していくという方法や、広域連携の取り組みによって市町がそれぞれ強みを生かしながら住みたい、住み続けたいと思えるような地域づくりを推進していくという方法も、いろんなさまざまなとにかく考え方があるというふうに思っております。２市の連携中枢都市圏に向けた動向につきましては注視をさせていただきながら、しかるべきときを迎えたときに、対応について研究を行い対処することが肝要で、まずは足柄上郡の圏域のあり方などについてしっかりと話をし、共通理解のもと、認識のもとで中心市に対する連携都市としての共同歩調について加わればよろしいのではなかろうかというふうに考えておりますので、この一つの流れに流されることではなく、じっくりと物事を見定めて冷静な判断をしていきたいというふうに考えております。

３つ目の松田ブランド認定委員会についてお答えを申し上げさせていただきます。現在、町では特産品開発事業で生まれた商品も含めて、町内の事業者が製造・販売する商品の中で、特に松田町の自慢の逸品となる商品を厳選をし認定を行い、これを広く発信してしっかりと売り出すことで松田町としてのブランド価値を高めることを目的に、松田ブランド認定事業を立ち上げております。

また、認定事業の前段といたしまして、特産品開発事業は町内の農林水産物を加工・製造し、町の特産品となる商品を開発する事業でございます。ブランド認定事業とは一線を画するものでございます。一例を申し上げさせてもらうと、松田町ではミカンやお茶が町の特産品として生産されておりますが、単にミカン・お茶ということで売るのでは松田ブランドとして認定することにはならない。ブランド品として認定するということは、糖度と品質の担保はもちろ

んのこと、ブランド価値がある商品として売り出していくに当たっては、事業者の生産体制がどうなってるかなど、誰がどうやって製造している商品なのかについて審査・認定していくことになります。

このようなことを踏まえた中で、松田町ブランド認定委員会は特産品であるだけではブランド認定することはなく、消費者の観点で逸品と言える商品なのか、事業者・商品双方の信頼性や今後の事業展開の将来性など町の顔となる商品として売り出していくことに適しているかなどを一般のモニターと専門家により目を通していただき、高い評価を得た商品を認定していく内容となっております。

現時点では、委員会の中で認定要領の作成や事業実施方針・認定基準の検討等の審議がほぼ終了し、今後、申請要項の公表を行い広く一般に公募するとともに、説明会等を実施いたします。その後、応募された商品に対しモニタリング会の実施や審査会などの厳格な評価を経て認定品の公表を行ってまいる予定でございます。松田町ブランド認定商品は、各種イベントへの参加やインターネット・紹介パンフレット等の広報媒体で情報発信を行うことにより、販路拡大を図ることを加えて製作事業者の事業拡大を支援をしてまいりたい。私はこの事業を推進し、松田町をより多くの人々に知っていただき、松田町に行きたい、住みたいというブランドイメージをつくり出したいというふうに考えてもございます。以上でございます。

５　番　中　　野　　今、国の平均出生率、出生人数ですか、出生率ですね、1.42。神奈川県は1.82…ごめんなさい、1.28ですね。国よりも低いんですね。それで、国は今後として1.8人を目標にと定めておるようでございますが、今、日本の全国の人口は１億2,700万人。これが2008年をピークにどんどんどんどん減り続けていって、2060年には8,700万人にまで落ち込むであろうと、こういうふうに言われています。そして高齢化率が約４割を超え、生産年齢人口は減少を続け、ひいては労働力不足に陥り、今の社会保障制度が維持をできなくなっていってしまうんではなかろうかと、こういった懸念をされているわけでございます。

ここにきて報道等で各近隣市町の人口ビジョンが発表されておりますが、これも国と同じく、私に言わせれば希望的な数値でしかなかろうというような1.

8人、大変高い水準になっておるわけでございますが、専門家筋に言わせますと日本国の人口が8,700万人にまで落ち込んでしまうんで、まず人口増加を見るのは難しいであろうというふうに言われておるわけでございます。そして、この松田町においても2040年、24年後には松田町の人口は6,377人にまで落ち込みますよという専門家すらいますが、今町長のお答えにありましたとおり、行く行くは平成50年には松田町の人口は１万人と推定しているということでございますが、それに至るまでのですね、では我が松田町は平均出生率をどのように見込んで目標として今後50年に至るまでの長い年月の中、松田町の人口がどのような形態になっていくのか、その辺のところもう少し詳しくお聞かせいただきたいと思います。

政策推進課長　それでは私のほうからお答えします。人口ビジョンでございます。国の社会保障問題研究所では平成52年に7,055人という、消滅都市というお話はいただいております。今回の人口ビジョンでございますけども、先ほど町長申しましたように2040年、平成52年に１万人を堅持しようということで始まっております。また、出生率につきましては、こちらは2060年、これ国が2.07ということを出しておりますので、規模的なことも含めまして松田町でも2060年には2.07という数字を掲げさせていただいております。2040年、平成52年ですけども、なぜ１万人かと申しますと、まず社会減をなくすということを第一目標に考えております。また住宅施策を進めることによって、何とか町に住んでいただこうということで検討しております。平成52年につきましては年間30戸程度を毎年住宅をつくっていこうということで人口ビジョンを打ち出して、平成52年には何とか１万人を維持しようというふうに考えております。

５番中野　平成52年に１万人を堅持しようという政策ですね。そのために今、ここに移り住んでいただくための政策も考えて、年間30戸ぐらいの住宅ですか、これをつくっていくということでありますが、課長ね、空き家対策的にですね、今全国でも御存じのとおり空き家対策、大変ふえ続けて悩んでいるところがあるんですが、これには町や不動産屋が仲介して、これを借り受けて住んでいただくという方法も大変たくさんあるんですが、一歩進んでですね、これから若者が新築住宅を購入するというのにも大変難しい時代になっていくんではなかろう

かと思いますので、ただ借家ということでなくですね、中古品として売ってしまうと、こういうふうなことをやっておられる自治体も全国に多々あるようでございますので、その辺のところもですね、人まねをしていいかどうかはわかりませんが、いいところは取り入れていくということですね。借家ということだけを念頭に置くのではなくて販売と。当然、不動産屋、また役場が仲介をしなければならないかと思うわけですが、ぜひその辺のところをやっていっていただいて、人口増につなげていっていただきたいなと思います。

それで、町長も前町長もよく言われてたことですが、この松田町が今後活性化し、生き延びていくためには観光立町にしていかなければならないと、よく今回の町長の所信表明のほうにも書いてございます。私もそうだと思います。商業も工業もまず見出せないような、ちょっとそのような町でございますので、そのために先日ですね、前の開成町の町長、露木順一氏の講演を皆さんの中でもお聞きになられた方があるかと思います。私も聞かせていただいたところ、松田町の活性というものについて講演をいただいたんですが、非常に松田町は交通のアクセスが非常にすばらしい。東名インターあり、小田急あり、ＪＲありということで、ほかの上郡５町にはないようなアクセスを持っている。ですから、このことを考えただけでも観光客が来ないということはないんだと。ただ、今ある松田のすばらしい部分を生かしきれてないと。

その一つには、この18回目を迎えた桜まつり、時には平成19年33万人もの観光客が来たわけでございます。そして、自然豊かな寄地区、この２つだけを見ても他町にはないような立派な観光客を呼べる部分があるではないかと。18回目を迎えた桜まつり、12分の１カ月しか稼働してないんですよ。寄地区についてもそうです。ロウバイまつりが１万2,000人来たといっても、これも12分の１カ月。この辺のところをもっともっと本当に観光立町にしていくならば、しっかりとしたビジョンをもってやっていかなければ。そして一年中を通して観光客が来られるような、そういうような形をやっていかなければならないと思ってます。

本山町長の前の前、平野町長の時代ですね、この桜まつりが始まったんですが…植えたんですが、あの町長はですね、松田山全山公園化という政策を持っ

てたんですね。よく唱えてました。私もジムニーを借り出して町長と一緒にこの辺にこういったものをつくろう、あの辺にこういったものをつくろうということで、よく御一緒させていただいたんですが、事半ばにしてあのような残念なことになってしまったわけですが、町長、そのぐらいのことやりませんかね。構想打ち立てませんか。全山公園化ぐらいのでかいことをね。ちょこちょこやってるんじゃなくてね、ぜひね…ごめんなさいね、ちょこちょこじゃね。ぜひ私はね、そのぐらいのでかい構想を持ってやっていっていただきたいな、そういうふうに思うんですが、その考えはどうですか。

参事兼観光経済課長　今回はたまたまといいますか、気候にも恵まれまして、桜まつりにつきましても12万人と。普通であれば、今の現在であれば５万人から８万人程度のところ倍以上来ました。気候にもよりますけれども、本当に今まで議員おっしゃられるように１カ月、寄も１カ月、松田も１カ月、その中に花という面ではロウバイあり、桜あり、ハーブあり、早咲き桜の次にはいろんなイベントを組んでおります。時期という面ではそういうようなことありますけれども、とりあえず松田については今後そういう形で、農地も大分ありますので制約もありますけれども、今考えておりますのは、当面の課題といたしましては今年度動き出しておりますのが里地・里山構想というのがございまして、とりあえず寄を全地域を里地・里山エリアに認定すると。その中で、これは自主的な組織になりますけれども、ある程度、例えば桜の地域、それは地域が自主的に動いたものについて県の補助も仰ぐ、また町も率先してそれに加入していくという形で寄地域は里地・里山構想の中で動かしていきたい。その次に当然、全部全て一緒にということはなかなか難しいところもございます。できれば本山町長のうちにそれも達成したいとは考えておりますけれども、それが軌道にのると同時にまた松田山につきましてもさまざまなものを取り入れた中で、里地・里山構想がいいのかどうかはわかりませんけれども、それにかわるものとしてもまた考えていきたいというふうに考えております。以上でございます。

５　番　中　　野　　結構です。この件についてばかりやってますと、まだいっぱいございますんでね、時間ね、ちょっと私もね、時間間違えましたね。町長の答弁はまた後ほどお聞かせいただきたいと思います。

今アベノミクス、先ほどどなたか言われましたけども、アベノミクスの恩恵にあずかってるのは大都市ばかりですね。我々、この地方都市の小さなところではそんな風すら全然吹いてないということでございます。そして財政が逼迫しているのが現状でございます。今回の予算の中でですね、特に国保や下水道、やはり先ほど町長が言われましたとおり一般会計からの繰入金が大きなものになっております。これは否めないですね。毎年毎年。それで、たしか4年前ですか、値上げをされた経緯がございますが、私はことし、この議会あたりでぜひ国保と下水道の見直しをというような形が出てくるのかなと思ってました。これから出るのかもしれませんが、もうやせ我慢をして町民サービスを続ける時代というのはもう私は終わったと思いますね。やはり町民には少しずつでも痛みを一緒に分かち合ってもらわなければならない。昔からの踏襲をしていれば何とか生活できるんだという時代は終わったと思います。したがいまして、私はなにも国保と下水道、どんどん上げろと言っているんではないんですが、まずその前にですね、町民が納得していただけるためにも、まず行政としてどこかに無駄がないのか、もっと改善する部分はなかろうかというようなことをしっかりと精査をして、その上で町民に納得をしていただいて、町民がもうこれ以上は無理なんだな、こういう政策が町長の言うおもてなしの政策なんですよね。ぜひその辺のところをやっていただきたいと思います。

それでですね、やはり全国のあらゆる自治体、いろんな自治体がですね、痛みを分かち合っていただくということで受益者負担の原則に基づいて少しずつ町民・住民からも負担をしていただこうという形がなされているようでございます。そういったこともマスコミ等で報道をされていました。その松田町の一つの例といたしましてね、お聞きするんですが、小さなことなんですが、今、福祉センターのお風呂が男湯のほうですか、壊れてしまっていて、女性のほうを使って交互に入ってもらってるということなんですが、あそこの福祉センターのお風呂をつくった目的というものはですね、当初はこの松田町に来られるハイカーとか、そういった方たちに気持ちよく入ってもらって帰ってもらおうということだったんですが、今どうなんでしょうね、私も行ったことないんですが。聞くところによりますと、あの近隣の人たちの、住民の人たちの家庭風

呂的になってしまっていて、毎日行って毎日同じ顔ぶれだと。それで、それも65歳以上、無料の人ばかりだということですね。さくらの湯が山北にはあります。あれは内外問わず１日１人400円取ってるそうですね。もし、そのような形でやっておられたんならば、この修理費2,000万から2,500万かかるとも一説には言われてますが、これもやはりすんなりと…すんなりとかどうかはわかりませんが、即座にこの修理に回せるんじゃなかろうかなと思うわけでございます。あそこを使わない町民に対しては、大変不公平感を感じているところだということを聞いております。まずですね、あそこのお風呂を今後直すのか直さないのか、お聞かせください。わからないですか。

福　祉　課　長　　ただいまの中野議員の御質問に対してでございますが、今、健康福祉センターのあり方検討会のほうを始めております。今、２回ほど審議していただいておりまして課題の抽出を図っております。町長のほうからも特命でそういうところの指示を受けておりますので、早急に検討させていただいた上で財源等の確保にも努めてまいりたいと思っております。以上でございます。

５　番　中　　野　　大変、財源の確保が難しかろうと思うんですが、あそこの社協にはですね、今まで町からの振り当てた補助金等の積み立ての基金が１億2,000万ぐらい、今あるんではなかろうかと思います。その中から流用というのはできないんでしょうか。

福　祉　課　長　　社会福祉協議会のほうも社会福祉法人でございますので、一旦入りましたお金につきましては個人には差し上げることはできない。だから町のほうに対してどうかということはちょっとわかりかねるところでございます。だから、今までその期限につきましては町のほうから出資金という形の部分で、まず100万円出させていただいた上で、その他もろもろ寄附金を合わせて今１億1,000万強というふうに伺っておりますけど、そういう形まで積み上げてまいりました。その部分についても事業については使うことができるというふうに伺っておりますので、そのあたりのところも社協のほうの基金に対する考え方の部分のところも町のほうとしてもちょっと一緒に考えていかなければならないときにきてるかなというふうに思っております。またその辺のところは精査させていただきながら、また報告させていただきたいと思いますので、御理解賜りた

いと思います。以上でございます。

５　番　中　　野　　わかりました。ぜひよろしくお願いを申し上げます。

次にですね、合併なんですが、このことについては2007年に２市８町で検討会が催されて、結果的に３年間の審議をした結果、足並みがそろわないということで断念をした経緯がございます。今回、南足柄と小田原がこのような形がまた再燃化されてきたわけでございますが、先日ですね、上郡の５町の正・副議長会で情報交換会と、公式なものではないんですが開かれましてですね、私もその席上おったんですが、このことについて皆さんと話し合った結果、５町の正・副議長さんほとんどができ得るならば合併はしたくないと、このようなお答えがありました。私も松田町もそうであろうかなと。先ほどの町長の答弁、でき得るならば、性急に事を急いであちらのほうに入ってしまうということはしませんよということでございました。いずれにしましてもですね、行く行くは考えていかなければならないことかと思いますが、それよりもこの５町が広域連携して足並みをそろえた上で、いずれか合併をするに当たっても、吸収合併にならないようなことが大変に必要ではなかろうかという、そういうような結論に至ったわけでございますので、その辺のところをぜひ町長のほうも重々念頭に置いて、このことに対しては対処していっていただきたいと思います。

そして、時間もないですからブランド認定なんですが、今回ですね、ブランド品に103万円、そして特産品開発に60万円、163万円という計上されてます、予算。私はね、もう前々からこの松田町のブランド何かつくろうよと、桜まつりに来ても買って帰る土産がないんだとブーイングが起こっております。この163万円が高いか安いかわかりませんが、本当にブランド品、または特産品をつくる気持ちがおありなのかどうなのかということで、去年は特産品については100万円が今回60万円に落ちています。ぜひですね、専門家を入れたですね、このブランド品・特産品を開発をされてはどうなのかなと。それは先日、大井町では昭和女子大のね、皆さん記事を読まれた方もいらっしゃると思いますが、昭和女子大の学生さんに依頼をして大井町でできる産物を使った里弁ですね。郷土弁当、これを開発したと。各あらゆるイベントにこれを提供していきたいというふうなことで、試食の結果、非常に好評であったということがあります。

それほど高額がかかる専門家を必要とはしない。松田町もこの認定委員会、多分松田町の人たちだけなのかな、選定は。その辺はわかりませんが、ぜひこの開発資金を使って専門家の意見も取り入れてって一刻も早く早急にこのブランド品をつくっていただきたいというふうに思うわけでございます。

それで、最後にですね、松田のブランド品というのはね、何も品物、形あるものばかりではないと思います。町長がおっしゃいます、もうとにかくいつもいつも毎回おっしゃいます。「おもてなし日本一」目指しているという。このおもてなしもブランド品なんですよね。今回、おもてなし予算として701万円がついております。先ほども何か町民参画型のソフト事業の開催というような具体的にということですが、この町民参画型のソフト事業の開催と、後ほど具体的にどんなことをやられるのか、ちょっとお聞かせいただきたいんですが。私はね、以前ね、今、大河ドラマでやっています、長野の上田城へ行ったことがあるんです。つい何年前かな、三、四年前に。ここのね、ガイド役の人たちは見事でございましたね。もう余りにもその親切丁寧さが見事に、私はしばし呆然と見とれてしまったもんです。そして、もう一度行ってみたいなという気にさせるんですね。後ほど聞きましたならば、イベントがあるときに、その町の、市の担当者がガイド役に当たるということなんです。折しも今、松田じゃ桜まつりをやっていますね。果たして町長が提唱します「おもてなし日本一」の精神を持って来られるお客様に対してですね、対応ができているかどうなのか、非常に失礼なことを言うようですが、疑問に感じるわけでございます。本当に日本一を目指すのであるならば、町長が唱えているだけでなく、今ね、町長が唱えているだけで、何か職員の人たちはついてきてないように思うんですね。町長が唱えているだけじゃなかろうかと。本当に失礼ですが。そう思ってしまうんですよ。町長、今後のですね、この「おもてなし日本一」を本当に701万円もつけて、どのようなことを具体的にやっていくのか。また、今、私が申しましたとおり、職員の皆様方にもどのようなことを常日ごろ提唱しているのか、その辺をお聞かせいただいて終わりにしたいと思います。

町　　長　ありがとうございます。まず、事業といたしまして、町民参加型ということで、どういうことをやるかという話をさせていただきますと、まず、先ほどお

っしゃるように、ガイドということで、今は地域の方々に本当に御協力をいただいてですね、本当ボランティアの方々にはもう感謝至極でございます。そんな中そういう方々をふやしていく。おもてなしというものに対する対象者というのが、ついついその話が出たときは、来るお客さんに対するおもてなしかというような御意見をいただいたりしていましたけども、我々の説明不足で、町民同士のおもてなしも当然必要であるということは、もう念頭にあったわけなんですけども。そうなったときに、比較的松田町の町民でありつつ、松田町のことをよく知らないというようなことがあるので、一つは松田町の歴史からひもといた紙芝居みたいなのをつくったりだとか、松田町クイズみたいのをつくったりしながら、町民の人たちが松田町っていつ合併したのとか、松田町の特産品って何とか、松田町の木って何だろうとか、松田町の木とかいうと桜とか言う人いますけど、違いますよね、実際のところ。だから、そういった町民でありながら知らないところがあるのを掘り起こして知ってくること、知ることによって、ふるさと松田を知っていただく。そうすると、あ、何か松田っていいところだよね。だんだん話をできるような人たちをふやしていくことによって、先ほどお話しいただいた、例えばじゃあ私ガイドになりますだとか、私、外国人の方がいらっしゃったら通訳もしながら地域のことをお教えしますよだとかという、町民の方々がどんどんそういった格好でふえていってもらって、ふるさと松田についてより知っていただくようなことをやることによって、いろんな取り組み、おもてなしというような格好でできるというふうに私は考えながら、町民参加型という部分に関してはやっていこうというふうに思っております。

また、先ほどちょっと一つお教えいただいた、町長が旗を振っているだけでなかなか職員の方々に浸透してないんじゃなかろうかというお言葉でありまうけども、少しずつ変わっていると思います。地域の、今まではやろうやろうと思っても、どうしてやればいいかなといったところがあったかと思うんですけども、少しずつ課を超えて、同じ課だけで、例えば政策推進課だけでなく、課を超えていろんなプロジェクト的な格好で若い人たちが会って、じゃあこうしようよ、ああしようよっていうことで少しずつ動いているところが見えますの

で、ちょっと皆さんにはまだまだスピード感がなくというふうなことがあるかと思いますけども、少しずつエンジンがかかってきているかなと思っています。以上です。

５　番　中　　野　　あと１分ありますので、すいません、最後に。これは提案なんですが、きょう、神奈川新聞でしたっけかな、載っていましたですね、伊勢原の。県が伊勢原の大山とか、秦野地区に来られる外国人、非常に外国人の観光客がふえていると。この桜まつりもすごいですね。特に中国人がすごいんですよ。言葉が通じないということで、非常にお店をやられている人たち、困っている。折しもきょうの新聞紙上に、神奈川県がですね、大山に特化した外国人向けの指差し会話帳を作成すると。外国語と日本語と同じものを併記してありまして、話さなくたっていいんです。外国人に中国語のところをこう指差す。「あなたは今、何が欲しいんですか」とかってね。そうすると、それによって言葉が通じるそうなんです。これによってですね、外国人の誘致が図れるんではなかろうかと。こういった会話帳を作成していると。これは県がとりあえずは大山とか秦野とか、その辺のところです。これをですね、もう少し丹沢のほうに向けていただいて、その辺のところはね、お願いをしますよということで、これをですね、飲食店とお土産物屋さんに配布しているそうです。非常に助かりますよというコメントがありましたんで、それは提案です。終わります。

議　　長　　以上で受付番号第２号、中野博君の一般質問を終わります。